

人権なら

2018年4月1日

第88号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

支局がアンケートに回答

なら人権情報センター事務局会議で中間集約

NPOなら人権情報センターは3月16日、事務局会議を開催。組織や事業・活動の課題整理について協議した。事務局会議は毎月1回、定例開催している。

NPO組織は先ほど、各支局に対してアンケート調査を実施。その回答について中間集約を行った。

NPO組織は解放同盟組織の解散と、NPO法人への移行や、反差別・人権交流センター(絆)の立ち上げ作業に慌ただしく、また、その直後に始まった東吉野「汲泉寺」をめぐる裁判への支援活動もあって、丁寧な組織運営や組織活動を定着させることができないまま、推移してきた。ある意味、同盟時代の組織と関係、運動感覚や意識を引きずったまま、活動してきた。行政からの「委託事業」や「指定管理」事業も行ってきたが、部分的なものに留まってきている。

組織の抱える厳しい課題克服へ論点を整理

NPO組織は今、財政的にも、人材的にも、厳しい状況にある。事務局員はほとんどが65歳を迎える。各支局でも、活動家の高齢化が進行する。「今と今後」を共に考え、議論し、何とか今後の見通しを共有するため、2月中旬からは各支局に提案して「アンケート聞き取り調査」を始めた。

アンケートの回答からは、各支局が抱える「高齢化や若い世代の流出」状況、同盟組織からの移行と、それ以降の活動や事業をめぐる状況など、様々な課題が浮き彫りになった。財政問題や、NPO組織と活動(事業)の見直しなど、NPO組織の総会に向けて組織課題を整理し、議論を深めていくことを確認した。

総会に向けては、「登記」をめぐる問題や、部落解放

運動史の編纂事業など、議案構成について論議。総会の開催日程・場所も確認した。

第10回「差別と人権」研究集会に向け協議

今年開催の第10回奈良県「差別と人権」研究集会については、開催予定日を確認。次回の会議で具体的なテーマや内容などを協議することとした。

田原本町企業内人権教育推進協議会の2018年度総会については、3月22日に第3回役員会、5月18日に総会開催が予定されていることを受け、講演の講師を藤田敬一さんに依頼することにした。

確定申告相談会が終了

中小企業者協会は2017年度分確定申告に向けて、昨年12月の相談説明会を皮切りに、2月7日から3月9日まで、相談会を実施。前半は県内各地で、後半は三宅町で、それぞれ開催してきた。



今回、地域別に受付時間などを細分化したことで、待ち時間が短縮できた。一方、税務署への提出書類にマイナンバーの添付が昨年度から義務づけられたが、マイナンバー・身分証明書の持参を忘れてきた人が多かった。



中企協は来年度から、添付漏れの根絶や、入力業務の迅速化に心掛けるとともに、会員の自主申告・納税実務作業の向上と、節税対策に向けて、より一層研修・研鑽を積んでいくことにしている。

越冬子ども夜回りに参加

時代とともに変わっていく釜ヶ崎の街

NPOこどもの里の「越冬子ども夜回り」が2月24日にあり、社会福祉法人ひまわりから参加した。昨年に続き、2回目。今回は小学6年生の息子が同行した。

夜回りの前に学習会。日本寄せ場学会運営委員で釜ヶ崎フィールドワーク案内人の水野阿修羅さんが「釜ヶ崎と若者・文化の町に」と題して話をした。この日の学習会は『「これからの釜ヶ崎」～子どもにやさしい排除のない多様な豊かなまち』（全7回）の第6回。

水野さんの話は今の若者の状況と釜ヶ崎についてだった。興味が沸いた。「建設業の求人は今、求人情報誌とインターネットが主流で、若者は見栄えの良い仕事やサービス業に流れている。若者を取り込もうと、『働きながらボクシングができる』と宣伝する業者も出てきた。音楽好きな若者が「難波屋」のライブに集まる一方、ライブができる家賃の安い自分の店を持つ若者や、アート系の活動をやろうとする若者も集まって来ている。また、「ひきこもり」をしていた若者、精神障がいを抱えた若者、「施設」育ちの若者も集まる。ネットで有名になったユニークな店にも殺到している。

釜ヶ崎も時代とともに変わっていくのだ、と感じた。

子どもたちは「地域でともに生きる」を実践

水野さんは「釜ヶ崎の子どもたちは、いろんな事情を抱えたいろんな人たちが周りにいて、そうした人たちとのつき合い方を学んでいる。たとえば、障がいを抱えている人、酔っ払ったおっちゃん、路上で暮らす人、やくざなおっちゃん。それは大きな財産」だと言う。

釜ヶ崎の子どもたちは、周囲の人たちと「地域で共に生きる」ことを、ごく自然に実践している。そこで暮らすことで、周囲の人たちを理解するために寄り添うことを覚え、つき合い方や、生きていくための知恵、術を身に付ける。そのことが人を排除しない世界をつくり、「生きる」ことに一生懸命で、支え合う心豊かな生活につながっていく気がした。とてもたくましいと感じた。

息子は「自分の生活は当たり前なことではない、と気づいた。

おっちゃんたちに、ありがとうと言われ、話しても



らえて、うれしかった」と作文に書いた。また、「通天閣のおっちゃんの野球の話は、おもしろかったなあ」「なんで、おばちゃんは泣いてはったん？」と、辛い胸の内を吐露した路上生活の女性のことを話した。

子ども夜回りで「これからの釜ヶ崎」を考える

息子は自身の生活との違いや矛盾、「なんで？」に気づいたのだ。最初は、おっちゃんとの出会いに躊躇していた。こどもの里の子どもたちの活発な様子を見て、刺激を受けた。しばらくすると、「こんばんは。大丈夫ですか？ おにぎりどうですか？」と駆け寄って声を掛けるようになった。おっちゃんたちのしんどさを感じたのか、心配そうに、ひざまずいて話を聞いていた。「おおきに。ありがとう」と言われて、恥ずかしくて、うれしくて、元気が出て、励まされて、動いていた。

夜回り前、♪なんでもまわりするの、という歌を、こどもの里の荘保共子さんのギター伴奏で歌った。おっちゃんたちの苦しみや、しんどさに寄り添いながら、自分たちができることは、なんだろう、と問いかける曲だ。歌ってからの出発は、とても良かった。元気が出た。

子ども夜回りは、子どもたちが「これからの釜ヶ崎」について考えることを大切にしている。釜ヶ崎で生きてきた子どもたちを信じ、培ってきたものを大事にし、未来に光を感じさせる前向きさがとても良い。改めて、子どもは希望の光なのだ、と感じた。

夜回りを終え、自分の「まち」を、「仕事」を、「生き方」を、もう一度見直してみたい。釜ヶ崎で見たこと、感じたこと、出会ったことを、いろんな人に話してみたい、と思った。良い機会を与えてもらい、感謝です。

(ひまわりの家・三宅町学童保育クラブスタッフ 山本薫)

原発被災地の障害者の暮らし

福島で支援活動する廣田英行さんが講演

「原発被災地の障害者の暮らし」をテーマにした勉強会が2月27日、三宅町・あざさ苑であった＝写真。「東和圏域ネットワーク スターとライン」が主催した。

勉強会は「震災と原発事故からもうすぐ7年。福島では一部の『帰還困難地域』を除いて、『帰還事業』が一斉に始まった。



賠償金が打ち切られ、故郷に帰ってきた人たちは1割にも満たない。放射能の不安から、子どもの健康を心配する子育て世代はなかなか帰還できない。帰還できない障害者・障害児を支える活動は『中通り』（県中部）や、いわき市の人たちの協力で続いている。

一方、高齢者、障害者、生活に困っている人たちが『終の棲家』を求めて帰って来ている。支え手の圧倒的な不足。社協のヘルパーさん1人に何人もの利用者が『週一回』で分け合っている状況。『帰ってきた人たちで、みんなで支え合って暮らしていける道はないものか』を模索するため、原発被災地の現状と、現場での活動の様子を学んだ。

放射能不安で帰還できない状況が続く

学習会の講師は、昨年4月、福島第一原発の周辺地域、双葉郡で立ち上げた「基幹相談支援センターふたば」で働く相談員、廣田英行さん（写真）。廣田さんは「ひまわりの家」の職員。震災直後、現地に入り、障害者支援をしてきた。昨年からは、2年間の現地出向で活動している。

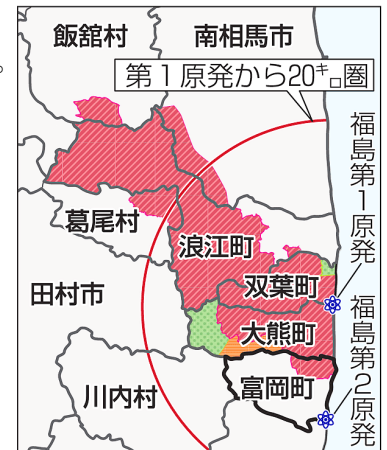


7年が経過したイチエフ（福島第一原発）近辺の放

射能汚染区域は徐々に解除され、状況が変わりつつある。富岡町・浪江町の一部警戒区域が解除され1年経とうとするが、帰ってきた町民は限られている。放射線量の問題や生活基盤が整っていない、などが要因だという。そんな街の様子を写真で紹介した。

五輪までの収束を目論む帰還促進に違和感

「当初、内部被ばくを恐れ、多くの人がマスクを着用していたが、今は警戒区域内でも少ない。私自身も危機感が乏しくなる」「帰還促進がんばらないと！」との声をよく耳にする。違和感しか抱かない。「2020年のオリンピックまでに片を付けたい人たちがいるのだろうか」とも考えている。



（2017年4月1日現在）

行政も疲弊した状況が続いている。心身とも疲れ、離職する人もいて、人員不足が続いている。どこの町村も障害福祉担当は一人とのこと。障害者の状況も、いまだに避難先で暮らしている方が多い。

この街で暮らす人たちの支え合いを

そんな中で、さまざまな活動をしている。「避難先での支援体制」をめぐるっては、行政機関が窓口を設置して対応しているが、双葉郡（帰還困難区域）などではコミュニティーが崩壊。避難先で名前を隠し、横のつながりもなく、問題を抱え込み、耐え暮らす人が多い。「ここで、この街で暮らす人たちの支え合い」を具体化していく活動が始まっている、という。

個別の支援はもちろん、活動の中心は「人づくり・街づくり」だとして、研修会や福祉関係者以外の人たちとの出会いとつながりを求めて活動している、と語った。現地の様子などが分かり、興味深く話を聞いた。

『琉球独立は可能か』出版

金城実・松島泰勝さんが記念の集いでトーク

金城実・松島泰勝著『琉球独立は可能か』(解放出版社)の出版を記念した集いが3月3日、大阪市内で催された。



第1部は金城実(彫刻家)さん、松島泰勝(龍谷大学教授)さん、丹羽雅雄(弁護士)さんの3人がトーク。司会は本書の編者、川瀬俊治さん。

本書は「彫刻家と経済学者が論じた琉球独立論」。2人の対談は自らの半生から、出会い、思想形成の過程を語り合いながら、沖縄差別を生んできた歴史と現実を検証する。辺野古新基地建設を強要する日本政府の暴力に抗う現場の苦悩なども語られている。今なぜ琉球独立論が議論となるのか、を明らかにする。そして、下支えする経済や、精神の自立にも言及。



編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

最強官庁財務省の森友文書改ざんは超ド級の国家犯罪だ。違法行為を重ね、行政を歪め、事実を隠蔽し、国会を欺き、国民を騙し続けてきた。背景には、教育勅語を推奨し、皇国愛国教育を推進する学校設立に共鳴した面々の蠢きがある。国粋主義の学校開校は戦争遂行体制づくりに向けた教育の国家統制支配の一環だ。闇深い安倍王国に忠臣する官僚たちは、学校設置認可を不法に謀り、国有地を不当な激安価格で売却した。今回、完全犯罪は崩れた。国民の怒りが爆発。政治への不信が渦巻く。腐敗政治を一掃し、真っ当な立憲民主政治に変えることが刻下の急務だ。

2人の独立へのアプローチは対症的だ。だが、2人の投げかける問いは日本人にも向けられる。

金城さんは「天皇制をどう克服するか、が独立の最大の課題だ」。松島さんは「琉球はいまだに日本の植民地。琉球の主張は聞き入れられない。日本政府はやりたい放題だ」。2人の思いが溢れたトークだった。

多くの人たちが祝いのスピーチや歌を披露

第2部は、多くの方から祝いのスピーチが続いた。大賀正行(部落解放・人権研究所名誉理事)さん、徐勝(立命館大学)さん、崎浜盛喜(奈良・沖縄連帯委員会)さんらが祝いのことばを述べた。



最後に、川口真由美さんが「ここに座り込め」などを熱唱。180人が来場した会場を盛り上げた。

高取「町家の雛めぐり」

高取町第12回「町家の雛めぐり」に3月15日、行ってきた。雛人形は土佐街並みの町家100軒ほどに飾られている。明見美代子・NPOなら人権情報センター理事が運営する「まちゃぼ」に寄り、節目にある人権情報センターのあり方や、明見さんが関与している「ポニーの里ファーム」の活動、3年目になる「人材育成協会」の活動などについて話し合った。



ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/